

Discussion Paper No.345

毛沢東時代における農村金融の役割の再評価

中央大学経済学部教授
唐 成

March 2021



INSTITUTE OF ECONOMIC RESEARCH
Chuo University
Tokyo, Japan

ABSTRACT

During the period of planned economy when China's strategic priority was to develop the heavy industry, did rural financial institutions function as "pumps" to provide funds for the development of urban industrialization? Or did they function as "blood transfusion" mechanism by injecting funds into programs designed to improve agricultural productivity? Based on the data culled from yearbook published by the Chinese government from 1949 to 1978, this paper examines rural capital flow (financial mode) and the impact of Rural Finance on agricultural development under the planned economy system.

Our findings suggest that: first, from 1952 to 1978, the total net outflow of funds in rural areas through financial institutions was 14.771 billion yuan, with an average annual of 547 million yuan. Of the total net outflow, credit cooperatives contributed 126.338 billion yuan and national banks 111.567 billion yuan. Second, the way in which the flow of rural funds through financial channels varied during the different time periods. For instance, during the early stage of the planned economy (1953-1957), funds continuously flowed into rural areas through financial channels, with a small and stable inflow scale; during the middle stage of the planned economy (1958-1970), rural funds were still in a state of net inflow, with a higher average annual inflow scale, but with a larger fluctuation range; during the later period of economic development (1971-1978), rural funds continued to flow out through financial institutions, and the scale of capital outflow showed a "U" shape.

The above findings shed light on our understanding of the positive role played by rural finance during the period of the planned economy.

Keyword : planned economy, rural finance, rural capital flow

* 中央大学経済学部教授

はじめに

中国は1949年から1952年までの間に、社会主義改造を完了した後、1953年から重化学工業優先発展戦略のもとで、大規模な経済建設を開始したⁱ。しかし、重化学工業の発展過程では、工業部門の資金調達をいかに確保するかが重要な課題であった。一般的に発展途上国の工業化の初期段階において、その発展のための資金は農業、商工業、外国資本という3つの源泉があると考えられる。しかし、建国初期の中国にとって、米国による対中「封じ込め」政策などの国際環境から、外国の資本・援助には頼れなかった。このため、資金の源泉は国内ということになり、しかも弱い小工業部門からではなく、残りの農業部門から調達せざるを得ない。

このような関係は農工間の資源（資金）移転論（intersectoral resource flow）として、多くの学者から注目を集め、対立する2つの仮説がある。1つ目は、開発の初期段階では、農業が工業化資金を提供するというものである。主に税、貯蓄を通じて、あるいは価格を操作すること（鋏状価格差）を通じて、工業化のための資本蓄積を行うという（林ほか1994、Knight and Song 1999、孔・何2009、袁2010、劉ほか2017）。この中でも農業価値収奪説として価格シェーレ（鋏状価格差）説が工業化のための資本蓄積を提供する主な方法であったという（馮・李1998）ⁱⁱ。2つ目は、工業部門の方が農業部門に資金を投下（移転）、主に財政的に農業生産へ投入される生産財を補助するという説である。Ishikawa（1967）は、経済発展の初期段階のアジア諸国では、工業部門の方が農業部門に資金を投下（移転）しなければならない、という仮説を提起し、後にNakagane（1989）、石川（1990）、中兼（1992）などの研究が挙げられる。このように、農業部門が工業化資金の提供者だったかどうか（農工間資源移転）をめぐる、なお、決着がついたわけではない（Nakagane2015；中兼2015）。

しかし、本研究の主たる目的は、このような農工間の資源（資金）移転論に関する仮説の再検討を意図するものではなく、農村信用社と国家銀行を通して、農村金融はどのように展開されていたか、それに伴う農工間の資源（資金）移転という重要テーマを考えるさいに不可欠な「農村金融的資金の流れの実態」とはどのようなものか、を解明することである。なぜなら、農工間の資源（資金）移転論に関するどちらの仮説においても、農業を基盤とする中国経済にとって、農業が直接、間接に工業化資金の増大に関係しているから、農業生産の拡大が工業化にとって肝要となってくる。つまり、工業部門と同様に、中国経済ないし工業化の基盤としての農業は、その生産を拡大させるために資金投入が不可欠であり、その際の金融の役割とは何かを明らかにすべきなのである。

これまで、農村部門への金融的な資金投入はいったいどこから調達され、どのように金融的な業務を行っていたかについて、必ずしも十分な議論がなされてこなかった。たとえば、代表的な議論として、農業が工業資金の提供者だという仮説（周・周 2009）は、工業化において最も不足する要素である資本を獲得するために、国家が金融部門を完全に独占して、農村から都市まで全ての金融機関をコントロールし、資本を含むあらゆる資源を総動員して、工業化建設を進めたと指摘している。また Zhou et al. (2016) は、国家の独占下にある金融システムは、農村部の余剰である貯蓄を預金という形で引き出し、都市部や工業部門に流していたと指摘している。しかし、このような議論は必ずしも十分な根拠に基づいて、立証されたわけではない。

また、国家銀行と農村信用社は、農村金融を構成する重要な組織であるにもかかわらず、実際にどのように金融業務を展開していたかは十分に明らかにされてこなかった。たとえば、周（2006）は農村信用社の制度的な変遷を体系的に捉えているものの、なぜ農村の余剰資金は農村信用社によって工業化に提供されることが可能だったのかというメカニズムを明らかにしなかった。馮・李（1998）は唯一、農村信用社のチャンネルを通じた農村資金の流出を推計している。しかし、その推計では、国家銀行を通じた資金の流れの測定は考慮されておらず、農村金融資金の流れとその規模を全体的に捉えていない。それゆえ、本研究は、馮・李（1998）の研究をベースとしながらも、農村信用社のみならず、国家銀行を含む農村部における金融的な資金の流れの全体像を捉えることにより、この分野についての研究をさらに発展させていくことをめざす。

具体的に、公開されている農村金融に関するさまざまな歴史的資料を用いて、毛沢東体制における農村金融のメカニズムおよび農村資金の流れの全体像を解明し、農村金融の役割とは何かを明らかにする。先行研究と比較すると、本研究には以下2つの特色がある。1つ目は、毛沢東期の金融資料とデータを整理し、毛沢東時代の農村金融における国家銀行と農村信用社のそれぞれの位置づけと金融業務の実像を明らかにする。2つ目は、農村金融を通じた金融資金の流れの全体像を示したうえで、各時期における異なる特徴を客観的に捉える。

本研究は次のような構成となっている。すなわち、第1節では、国家銀行と農村信用社に焦点を当てて、農村における金融システムはいかに形成されてきたかを明らかにする。第2節では、金融チャンネルを通じた農村資金フローの規模と時期別の特徴を捉えて、もともとは工業資金の重要なチャンネルではなかった農村金融が、1970年代から工業資金の重要なチ

チャンネルとなったことを解明する。そして、最後に本研究の結論を述べる。

第1節 農村における金融システムの形成

1-1 国家銀行としての農村金融の展開

金融は実体経済の潤滑油として機能するものであり、一国の経済発展において重要な存在である。金融の発展がどのようにして経済成長を促進させるのかについて、Levine(1997)は、貯蓄動員、資源配分など5つの機能に分けて、金融システムの役割を明らかにしている。歴史的な視野に立てば、1897年に初めての近代銀行「中国通商銀行」が設立されて以来、今日までの金融システムはずっと銀行が中心的な存在であった(唐 2012)。ただ、異なる経済体制の下で、銀行システムが持つ機能も特徴も異なるものであった。たとえば、民国の北京政府期では、民間銀行を中心としていたが、南京政府に入ると、次第に政府系金融機関による「寡占状態」に転じるようになった。

そして、1949年以後の中華人民共和国では、金融システムは重工業優先戦略の下で、銀行の多元的な所有制が単一化されたのである。その最大の特徴は、実質的に唯一の銀行である中国人民銀行が、中央銀行と商業銀行という二重の機能を担い、信用を国家銀行に集中することであった(中国人民銀行編著 2008: 50 ページ)。その際、農業を基盤とした中国にとって、農村金融は極めて重要な位置づけにあったことは言うまでもない。国家銀行と農村信用社は農村金融の全体を構成する組織として、政策的に推進されるようになった。

たとえば、1951年初めの中国人民銀行による「第二届全国金融会議」では、農村金融業務を見直しの一貫として、①省分行業務の80%は、農村金融業務に割り当てることや、銀行支店組織を県から区へ広げて、銀行の営業所を設置すること、②信用合作事業を発展させること、などを明確に規定した。実際、1953年までにほとんどの県に、銀行の営業所が設置されるようになったⁱⁱⁱ。

また、政務院(国務院)は1953年から1957年までの毎年、農村金融に関する指示を出していた。たとえば、1953年8月31日、政務院は「農村融資に関する指示」において、「農村における中国人民銀行の主な任務は、農業融資や信用合作社の組織などの農村金融活動を通じて、貧しい農民を支援し、生産を発展させ、高利貸しと経済闘争を行うことである」と規定した(盧漢川主編 1984: 313 ページ)。

さらに、1954年に中国人民銀行が開催した「第一届全国信用合作会議」では、国務院副主

席の鄧子恢が農村金融業務について、次のように述べている。すなわち、「農村信用貸出を行い、信用合作を発展させることが農村金融業務の基本的な任務である」と指摘し、国家銀行は農業貸出と信用合作社事業の発展を領導する、という役割が示された。

次に、国家銀行は農村に向けて、どんな貸出業務を行っていたかについて説明しよう。1951年5月の「第一屆農村金融業全国會議」において、次のような貸出項目が規定された（盧漢川主編 1984：83-95 ページ）。すなわち、第1に農業生産貸出として、主に農地、水利、種、肥料、農具、牧畜、漁業、農業、各種特産農作物生産の貸出を定めている。また、①農業生産に従事する農民に対して、組織的に支援を行い、手続きの簡略化や金利などの貸出条件を優遇すること、②貸出による、生産技術の改良と新式農具の導入などを通じて、生産量のアップを図ること、③綿花、タバコ、麻など特定の農産物生産に専有資金で貸出を行うこと、など3項目を貸出の重要対象としていた。

そして、第2に流動性資金の貸出である。主に農民の生産活動に関する一時的な困難を解決しつつ、資金が可能な範囲で、農民生活の困窮救済（結婚、葬、疾病、教育、家屋の修理など）のためにも貸出を行うことである。ただし、流動性資金の貸出はエリア内の支店または営業所が集めた預金から捻出することとされた。1950年から1952年の間、国家銀行の農村への貸出は16.6億元に達していたが、貧困農民への貸出が全体の77.4%を占めるほど、貧困農民を主な貸出の対象としていたことがわかる。このように、国家銀行が低金利の融資を始めるまでは、貧困農民の借入先は高利貸ししかなかった。国家銀行から低金利での借り入れが可能になったことで、彼らの生活はある程度守られ、貧富の格差の拡大を抑制する効果があったと考えられる。

国家銀行による貸出の範囲は、国営農場や林業、牧畜業、漁業、手工業など幅広い対象となっているが、国営農場の生産拡大に重点的に貸出が行われていたと思われる。たとえば、1954年の中国人民銀行総行の「1954年国営農（畜）場への貸出に関する指示」では、貸出の対象、用途、規模、期限、利率、保証などの項目が具体化している。また、中国農業銀行総行は、1955年5月の「国営農場上半期農業の貸出業務」の座談会や、1956年10月の「全国国営農業貸出業務」の専門会議を開催し、国営農場による食糧生産の増産に伴う金融的な支援を行った。同行の1956年9月末の貸出残高は1億1,118万元で、対前年度同期比で2倍以上拡大し、農業生産の資金需要に対応した。また1956年上半期の統計によれば、24の省（市）の機械農業貸出においては、生産費用が83%、部品備蓄が13.5%を占めていた。

このほかにも、国家銀行は林業、牧畜業への貸出業務も積極的に行っていた。たとえば、

1951年1月および1952年1月にそれぞれ林業への貸出業務を具体的に規定した。すなわち、林業への貸出の用途、対象、期限および金利、融資計画と資金の返済計画、保証方法、実施部署などを定めた。1956年2月に農業銀行は、当時展開されていた農業生産合作運動を促す一環として、牧畜業への貸出業務も具体的に規定している。特に、内モンゴルや新疆、青海などにおいて、牧畜業生産合作社に対して以下の3つの融資対象、すなわち、①基本建設融資（生産設備、水利建設など）、②生産費用融資（飼料備蓄、肥料、少農具など流動性資金）、③貧困牧民合作基金融資（合作社への出資金負担など）、などを定めている。このように、国家銀行は農村での貸出業務を通じて、農業生産の拡大における金融的な役割を担っていたと考えられる。

1-2 農村信用社の普及と金融業務

一方、農村信用社の歴史は1920年代に遡るが、新中国の成立までに全国で800を超える信用社が存在していた。1949年以後に金融システムの単一化が進むなかで、農村信用社は唯一の農村金融の末端組織として、規模的に拡大した。このことは農村信用社が中国金融において、重要な存在であったことを示している。また、以下のいくつかの重要な会議の内容からも農村信用社の役割、金融事業の内容を読み取ることができる。

たとえば、①1949年に中国人民銀行は「合作社信用部に関する今後の推進策」を公布し、農村信用社の任務に関して、零細資金の集積、生産・流通のための資金供給、社会経済の繁栄および公共資産の蓄積であると示している（盧漢川主編 1984：4ページ）。また、②1950年2月21日から3月12日に開催された「第一届全国金融会議」では、農村信用社に対して、信用事業への展開、預金と貸出業務の実施、など5つ基本的な任務を定めた（盧漢川主編 1984：40ページ）。

このように農村信用社は、貯蓄動員と信用貸出を通じて、農村経済を発展させることを目的とした。また、1951年5月の中国人民銀行による「第一屆農村金融業全国會議」では、①農村信用社の展開は下から広く組織化すること。②国家銀行の領導（指導して統率すること、「指導する」よりも命令としての含意が強い。以下同）の下で、国家銀行を補完し、互いに協力して農村金融業務を遂行すること、などが決定された。

農村信用社と国家銀行との金融業務関係について、中国人民銀行は1954年により明確な規定をしている。すなわち、①農村信用社は農村貯蓄業務を行うが、銀行はその業務を行わず、②農村信用社は1年以内の短期貸出を中心として、社員の短期的かつ零細資金の流動性

需要を解決することを主な貸出業務とするのに対して、1年以上の貸出は国家銀行が行うこととした。また、1956年に農業集団化が完成した後、①農村信用社は社員個人による副業生産および生活上の臨時的な困難解消を貸出目的とすること、②農村信用社の業務は自己責任の下で独立会計をもって行うこと、③預金が余るときは銀行に預託し、資金が不足する場合、銀行は利子を優遇して資金供与すること、などを定めていた。

このように、農村信用社に与えられた役割は、国家銀行とともに貯蓄機能と貸出機能を持ち、農村金融業務の一翼を担うことである。この背景には、新中国にとっての農業は経済の基盤そのものであり、農村および農業の発展は重化学工業化優先戦略を進めていくうえで、極めて重要だったことがある。また国家銀行によって、資金が独占されている単一化金融システムの下では、庶民の零細資金は、唯一国家銀行に管理されることのない資金源であった。したがって、農村での零細資金を集積するため、農村信用社の拠点を拡大していくことは不可欠であった。

農村信用社はこのような役割を果たすために、どのように草の根組織を拡大させていたのか、以下の報告書からその一端を覗くことができる。1953年の山東省人民銀行による中共山東分局への報告書では、農村信用社の展開について、次のように述べている（中国農業銀行山東省分行1991：201ページ）。すなわち、①県ごとに信用社1社、2か3ヶ所の互助組を試験的に設立し、国家銀行の県や営業所はこれらの設立状況を重点的に把握すること、②そのうえで、設立の経験を総括し、積極的かつ計画的に他地域へ広げていくこと、③農村信用社の業務展開に関する制度づくりは、各地の銀行が責任を持って指導し、資金運用面において、預金が余れば銀行に預託し、逆の場合は銀行が支援すること、④農村信用社の業務方針は、社（組）員に対して、預金と貸出は異なる金利水準で、農業生産への金融サービスを提供することであり、金利は現地の民間自由貸出利率より低く、銀行金利に近い水準で設定すること、④信用社幹部の待遇について、生産現場から半分程度離脱し、状況に応じて所得補填すること、などを報告している。

次に、農村信用社の金融業務がどのように展開していたかを、以下の報告資料から窺ってみよう。山東省「海陽県信用合作工作に関する報告（1951年6月）」である。報告によれば、①海陽県は1949年に13ヶ所の供銷合作社（購入販売協同組合）で信用部を設立したが、1951年に10ヶ所の信用合作社に組織変更し、社員数15,500名で、出資金3.5億元まで規模を拡大させた。②この10社で36名の專業幹部の活動範囲は、52郷の221村、県全体の三分の一の地域をカバーし、国家銀行と合わせて、県全体の預金66.7%、貸出76%の業務を担っていた^{iv}。

③1950年に、農村での遊休資金を815,457万元集め、このうちの689,481万元を貸出していた。貸出は主に社員および非社員を対象とし、農業生産とその副業生産に対して、井戸掘り160ヶ所、水車15部の購入、新式農具150件あまり、牲口2,565頭、肥料146万斤、漁船の増加と修理52隻、漁網1,360式、手工業者2,101人への金融的な支援を行った。④このうち、最も規模の大きい大辛家聯村信用合作社は、社員2,322名で、出資金6,520万元に上った。大辛家聯村信用合作社は5つの郷、24の村を営業エリアとして、社員は郷全体の64.3%を占め、農民たちは信用合作社のことを「自分の小銀行」と呼んでいるという（中国農業銀行山東省分行 1991：201ページ）

以上の2つの報告書から、農村信用社は国家銀行の指導の下で、組織の拡大を図り、零細資金を集積して、農民、農業に金融サービスを提供し、農民から支持されていた様子がわかる。農村信用社（信用部）の数は、1950年にわずか542ヶ所しかなかったが、1953年になると、9,831ヶ所まで増えていた（中国人民銀行農村金融局信用合作科編 1954：7ページ）。そして、1953年から農業集団化運動が始まって、農村信用社の数は1955年末までに15.9万に急速に増加し、出資金も2億元に達した。1956年に全国97.5%の郷で、農村信用社が設立され、「一村一社」という信用合作化が全国規模で実現された（盧漢川主編 1986：451-452ページ）。

表1 毛沢東期における農村部の農村信用社の発展動向

年	出資金（万元）	機関数（所）	一カ所当たりの出資金(万元/所)	従業員数（人）
1953	1,201	4,349	0.276	-
1954	12,877	126,452	0.102	-
1955	20,452	159,393	0.128	-
1956	27,000	102,558	0.263	213,494
1957	31,018	88,368	0.351	-
1958	41,554	133,642	0.311	-
1959	49,274	198,610	0.248	81,747
1960	50,656	207,145	0.245	163,356
1961	50,656	188,749	0.268	138,655
1962	50,656	127,864	0.396	156,436
1963	61,231	294,953	0.208	160,459

1964	68,392	306,000	0.224	168,000
1971	104,417	342,006	0.305	165,134
1972	120,648	327,565	0.368	170,475
1973	123,430	318,855	0.387	175,369
1974	120,995	327,228	0.370	182,953
1975	138,036	324,971	0.425	190,005
1976	146,716	366,375	0.400	208,817
1977	149,195	420,284	0.355	221,202
1978	171,721	418,120	0.411	237,810

出所) 盧漢川主編 (1986) 『中国農村金融歴史資料-1949-1985 大事記』より整理。

表1は毛沢東期における農村信用社の出資金、ネットワーク数、専業者数の時系列な変化を示したものである。これを見ると、農業信用社の出資金規模および数は、1953年の1,201万元、4,349所から1957年にはそれぞれ3億1,018万元、8万8,368ヶ所まで拡大し、一か所あたりの出資金も2,760元から3,510元に増加した。しかし、農村信用社は1958年以降、大躍進や文化大革命を経験し、その管理体制および財務の混乱などがあった。それでも、1977年には出資金14億9,195万元で、信用社数42万社を上るほど、大きな発展を遂げていた。

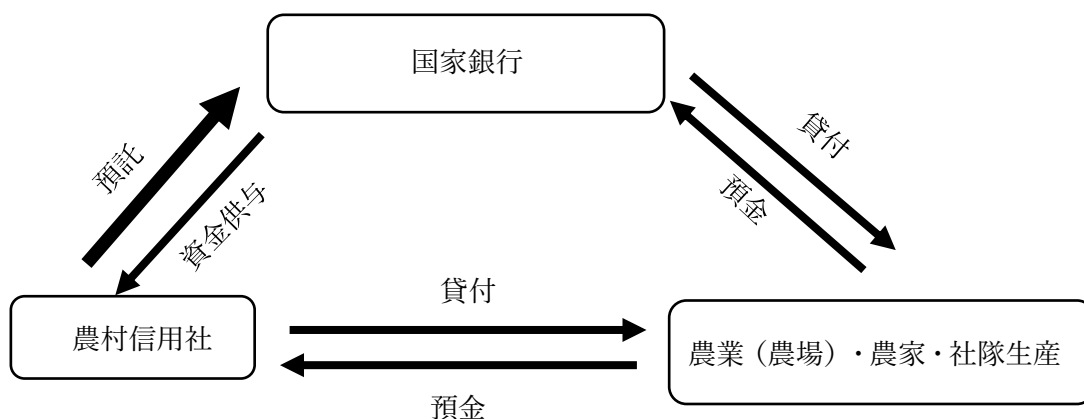
以上のように、毛沢東期を通じて、農村信用社は国家銀行の末端の金融組織として、組織的な拡大をみていた。しかし他方では、1953年に第一次5カ年計画が実施されてから、金融システムが次第に独占的になる中で、農村金融の性格も変わっていった。孫・潘 (2019) は、農村信用社は1952年までは農民独自の資金互助によって組織されていたが、1953年以降国家銀行の末端組織となり、農村金融において単一化体制が形成されたと指摘している。つまり、毛沢東期における農村信用社の発展モデルもまた、必然的に国家の主導による金融システムの中に属していたと考えられる。

第2節 農村部における金融的資金の流れ

2-1 農村金融における資金フロー

上述したように、農村金融に付与された機能は、貯蓄的動員とそれを主な原資とする金融資源の配分という2つであり、国家銀行と農村信用社がその担い手であった。したがって、

図1 農村部の金融フロー

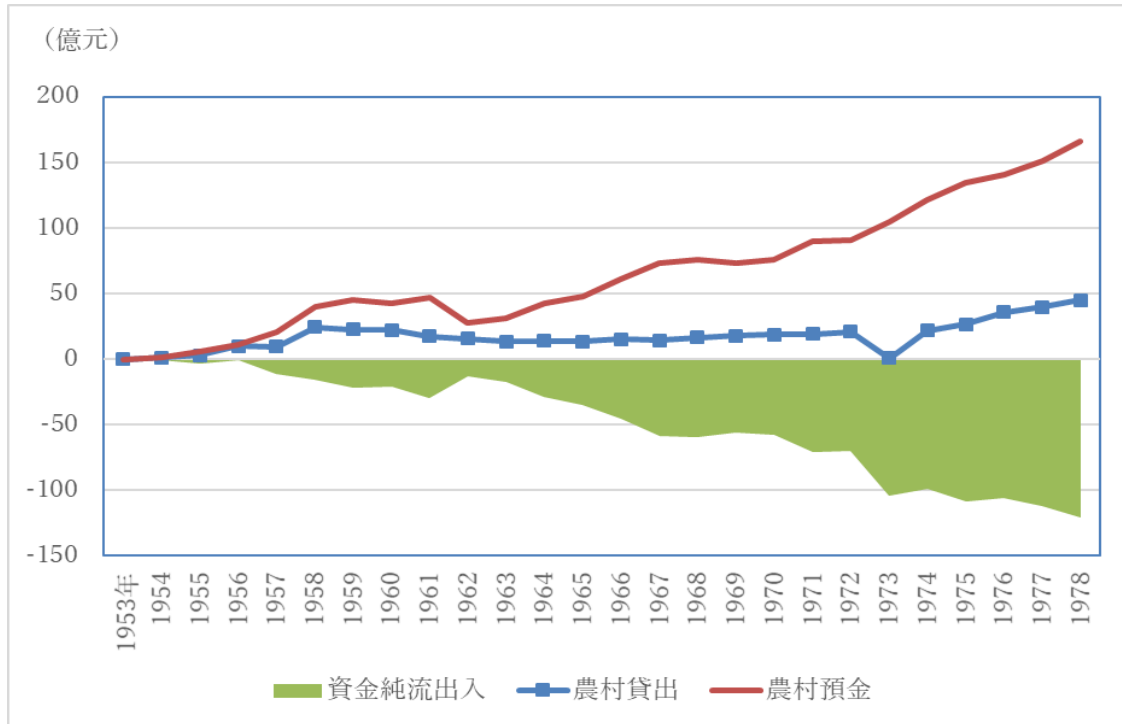


出所) 筆者作成。

フォーマルセクターを通じた金融的な資金の流れは、国家銀行と農村信用社という 2 つチャンネルに分けることができる。その資金の流れは図 6-1 で示すことができる。すなわち、中国人民銀行（農業銀行）は国家銀行として、預金と農業生産への貸出、農村信用社は国家銀行の草の根組織として、農村の預金を集め、小額な農業生産や農家に貸出を与えることを主な業務としていた。

前頁より図 6-1 具体的に、農村信用社は農村預金（主に農業預金、農家預金、農村企業の預金）を吸収し、集団農業、農村企業、農家などに貸出を行っていた。また、農村信用社は、集めた預金の一部分を貸出し、その多くを国家銀行に預託し、その規模が年々増加していた^{vi}。これに対して、国家銀行の場合は、農村信用社による預託資金を主な原資として、直接農業への貸出を行っていた。このような構図を見ると、農村部からの余剰資金は最終的に国家銀行を介して、都市部（すなわち工業部門）へも移転したことが推測される。しかし、このような資金の流れはどのような規模であったか、またどんな特徴を持っていたのかについて、これまで明らかにされてこなかった。以下では、このような金融的な流れを金融資料に基づいて、推測してみよう。まず図 6-2 は、農村信用社の資金流入と資金流出の状況についてである。

図2 農村信用社を通じた資金の流れ



出所) 盧漢川主編 (1986)、蘇寧主編 (2007) による筆者推計。

この図を見ると、1953年から1978年にかけて、農村信用社の預金規模は変動しながら、0.1億元から166億元まで増加した^{vii}。また、貸出規模も、時期によって変動幅が大きいものの、1953年の0.2億元から1978年の45.1億元へと増えている。しかし、1958年から1975年の間は貸出規模はほぼ変化せず、預金規模が増える一方であった。貸出のうち、農村企業への貸出は、1971年の0.8億元から1978年の12.1億元にまで増加し、これは1970年代以降における農村五小企業（社隊企業）への貸出である。農村企業は1978年以降の改革開放政策の実施により、後に郷鎮企業へと変貌し、著しい発展を遂げた。

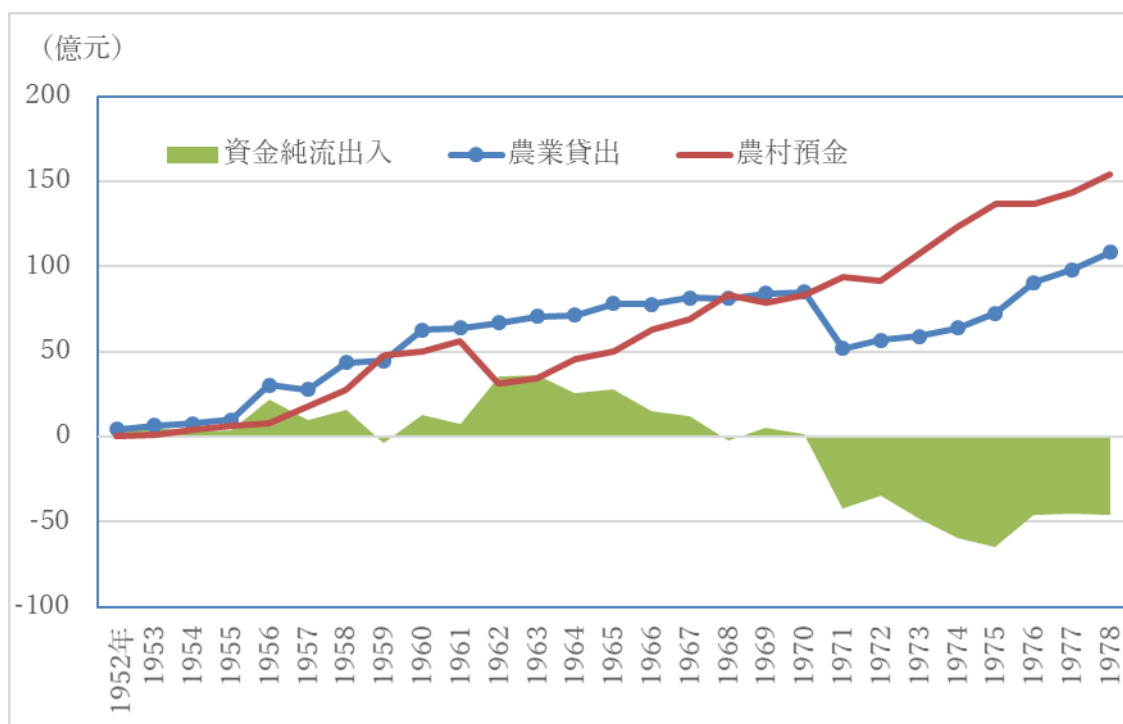
このように、農村信用社を通じた農村資金の流れは、全期間で合計1274.4億元規模の流出であり、統計した初年度の1953年を除いて、全ての年において、年平均50.9億元の純流出であった。これらの流出は国家銀行への預託金となり、その規模が1957年の11.2億元から1978年の120.9億元へと次第に拡大していった。このように、農村信用社は農村での貸出機能よりも貯蓄動員の機能に特化し、農村資金を吸い上げるという役割も果たしていたと考えられる。

2-2 国家銀行における金融資金の流れ

次に、国家銀行による農村資金の流れの状況を検討してみよう。国有銀行は農村への貸出の資金源は、主に農村での預金、すなわち①農村信用社の預託預金、②国家銀行への農村預金、という2つに依拠したものであると考えられる。しかし、理論上、預金を上回る貸出の差額は都市部門からの資金調達が必要となる。図6-3は国家銀行の資金流入の動向が示されている。

これを見ると、国家銀行を通じた農業貸出残高は、1952年の4.2億元から1978年の156億元まで増加していた。また、その原資として、農村信用社の預託金の割合が1954年の34.3%から1978年の94.2%まで増えていた。そして、国家銀行を通じた農村資金の流入は以下のような特徴が見られた。すなわち、1950年から1960年代にかけて、国家銀行を通じた農村資金は純流入であったが、その規模は次第に拡大していた。この背景には前掲図2で示したように、1950年代の農村信用社の預金集積力がまだ弱かったため、預託金の規模も小さかったことがある。

図3 国家銀行を通じた資金の流れ



注) 1957-1965年農村信用社の預金データが不完全のため、山東省金融データの平均値により測定している。

出所) 盧漢川主編 (1986)、蘇寧主編 (2007)、高維 (1958) などによる筆者推計。

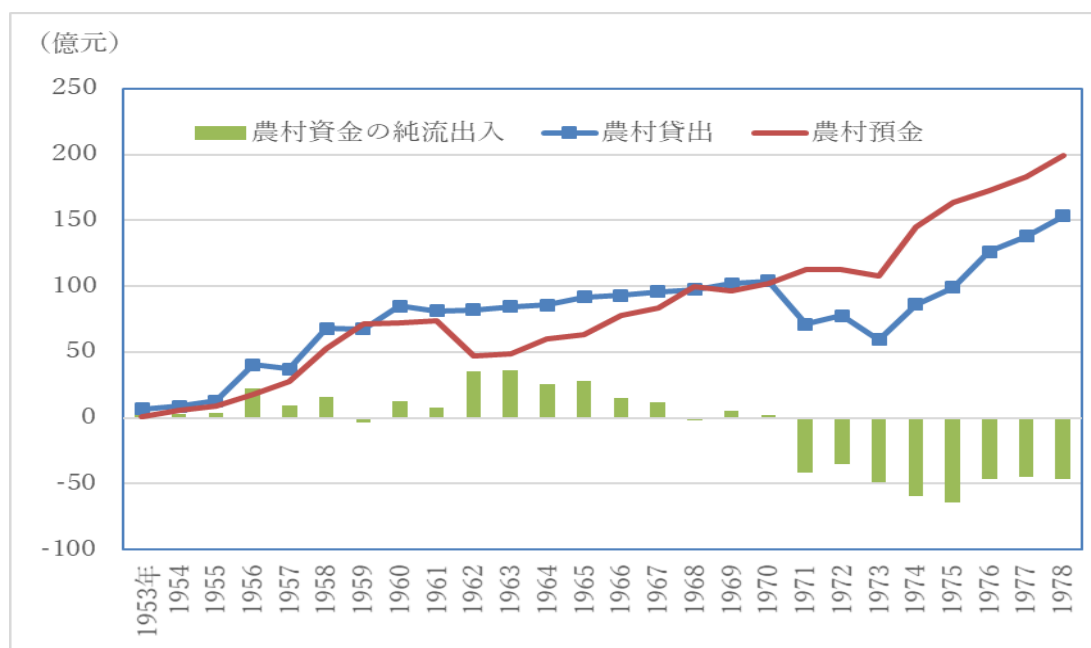
しかし 1970 年代に入ると、国家銀行を通じた資金の流れは逆に農村からの流出に転じるようになり、その規模が次第に大きくなっていった。したがって、国有銀行を通じた農村部の資金流出規模は、全期間を通して、147.7 億元に達しており、年平均 5.5 億元であった。つまり、国家銀行を通じた農村資金の流れは、時期によって異なる特徴を持っており、1960 年代までは農村への流入、1970 年代は農村からの流出というパターンが明確であったといえる。

次に、農村信用社と国家銀行を通じた農村資金の流出入の動向を見てみよう。それは図 4 によって示されている。全体的に見ると、金融手段を通じた農村部の資金動向は、当初の農村部への純流入から後に純流出へと変化し、その資金の規模も拡大していた。この特徴を次のような時期に分けて、示しておく。まず第 1 期（1953～1970 年）では、個別の年（1959 年、1968 年）を除いて、金融的な投資資金は、都市部門から流入し、その規模は合計 234.5 億元で、年間平均 13.0 億元の純流入があった。特に 1962 年、1963 年の流入規模はそれぞれ 35.1 億元、36.2 億元と、最も大きかったといえる。

この背景には、1958 年から始まった大躍進政策の失敗、および 1959～1961 年の自然災害により、農業生産が急激に減少したことの影響がある。松村（2011）によると、1961 年 1 月に国家計画委員会主任の李富春は「農軽重」方針を提示した。これは経済計画を編成するにあたり、農業＞軽工業＞重工業の優先順位で政策を決定する、言い換えれば予算を配分するということである。大躍進政策のもとで看過されていた農業建設の強化、農家の所得増大、農民負担の軽減といった事項が、最優先課題として浮上したのである。したがって、農村部は生産の回復を促進するために、より多くの資金が必要となり、1962 年に農村への金融資金の投入が大きく拡大したと考えられる。

また、1972 年以降の農村資金の動向は、これまでの小規模な流入傾向から、流出する傾向に転じるようになり、しかも規模が拡大していた。この背景には、1970 年から内陸での三線建設が再び過熱化し、基本建設投資が全国投資総額の 67.1%を占める中で、三線建設インフラ投資が 55.3%を占めるようにことがある（胡鞍鋼 2007：675 ページ）。さらに、1972 年には毛沢東が、「深挖洞、広積糧、不称霸（深く洞窟（防空壕）を掘り、広く糧食を蓄積し、覇を唱えない）」と指示し、ソ連の侵攻に備える指示を出した。つまり、毛沢東の指示により、中国は重工業優先戦略の下で、よりいっそう軍事工業を優先するようになったのである（胡鞍鋼 2007：671 ページ）。また、文化大革命による国民経済への破壊的な影響が次第に現れて、企業の生産が落ち込み、赤字の増加、さらに財政収入の減少と支出の拡大

図4 毛沢東期における農村資金の純移転



出所) 図2 および図3 による。

などが顕著となった(盧漢川主編 1986: 474 ページ)。

このように、農村への資金投入は、農村金融を通じて、1950-1960年代は都市部門からの純流入であったが、1970年代は純流出に転じていたことがわかる。本来、農村金融の役割は農業生産を拡大させるために、農村で貯蓄を動員し、それを原資として農村での貸出を行うことであった。しかし、1950-1960年代においては、ほとんどの年で貯蓄以上の貸出が行われていたため、都市部門からも資金が流れ込んでいった。逆に1970年代に入ると、農村資金はむしろ都市部門へ流れ出すようになり、その規模も拡大していった。つまり、農村で動員された貯蓄は貸出を通じて農村への還流よりも、都市部(工業部門)へと流出し、重工業化の優先的発展に使われていたのである。

おわりに

本研究では、毛沢東期における農村信用社と国家銀行という2つ金融組織に焦点を当てて、それぞれの金融的な役割とは何かを解明した。本研究の主なファインディングは以下のとおりである。第1に、毛沢東体制において農村金融は重要な位置づけにあり、国家銀行と農村信用社は、農村金融の全体を構成する重要な組織であった。第2に、農村金融の主な機能

は、農村での貯蓄動員と貸出であったが、国家銀行と農村信用社はそれぞれ異なる特徴を持っていた。すなわち、農村信用社は貯蓄的動員、国家銀行は貸出を主な金融的機能していたといえる。第3に、農村金融を通じた金融的資金の流れは、期間によって異なる特徴を持っていた。すなわち、1950-1960年代では非農業部門の資金が流入し、1970年代では農村部門の資金が流出であった。

本研究の分析結果から、農村金融の役割について、これまでの先行研究とは異なる主張が支持される。すなわち、農村金融は必ずしも工業化のための資金調達のための主要なチャンネルではなかったといえる。むしろ、もともとは農業基盤を強化するため、国家銀行と農村信用社という2つの金融組織が拡大され、農村による農村のための貯蓄動員と貸出を行っていたことが明らかになった。しかも、1950-1960年代において、金融的投入資金の不足分はむしろ非農業部門から流入していたことが明らかになった。唐・張（2020）は1949-1978年の省レベルのパネルデータを用いた実証分析の結果から、農業貸出は農業の産出高を強く促進したことを明らかにしている。このように、毛沢東期において、国家銀行や農村信用社は農村における金融的な機能を通じて、農業の生産拡大および農村部門の発展のために程度の成果をあげたといえる。

しかし、当時の特殊な環境・制度の下にあって、1970年代に入って、工業化のための資金需要を満たすために、農村資金は国家銀行を通じて、直接的に都市部に移転されるようになった。言い換えれば、農村金融における農村信用社と国家銀行は、農村での抽血型金融機構に変貌するようになった。農村の資金による農村の発展というかつて農村金融の機能が変質し、結果的に都市部と農村部の経済格差をいっそう拡大させていったのである。

脚注

ⁱ 1953年9月に周恩来は第一次五カ年計画の基本任務は、重工業を優先的に発展させるという重工業>農業という発展の順序を明確にしていた（胡鞍鋼 2007、pp.184-185）。ただし、第一次五カ年計画は1955年に正式に策定した。

ⁱⁱ たとえば、馮・李（1998）は、1952年から1990年までの中国の工業化において、農業から約1兆元を調達し、年平均250億元の規模を工業部門へ提供していたと推定している。その中で、価格シェーレ（鉸状価格差）説による資金の提供規模も最も大きいとしている。

ⁱⁱⁱ 実際には、中国人民銀行の区レベルの営業所数は、1950年末の457ヶ所から1953年末には13,290ヶ所に拡大していた（尚明主編1989『当代中国的金融事業』312-313ページ）。

^{iv} たとえば、1950年に農村での遊休資金815,457万元を集め、このうちの689,481万元を貸出していた（中国農業銀行山東省分行（1991）『山東農村金融歴史資料-1938-1990』201ページ）。

-
- v 三木（1956）によれば、中国人民銀行は1955年3月1日より新人民幣を発行して旧人民幣を回収した。交換比価は新幣1元対旧幣1万元である。
- vi たとえば、山東省の農村金融歴史資料（1991年）から、山東省の国営銀行の農村預金において農村信用組合の平均再預託率は86.5%（1954～1978年）であった。
- vii このうち、集団農業と農家の預金規模はそれぞれ1955年の3.1億元と0.1億元から1978年の93.8億元、45.1億元までに増加している。また、1958年から1971年までの間、集団経済の預金の割合は53.3%から71.1%に増加したのは、1958年以降に実施された大躍進運動の背景により、農民の生産手段は集団に属した結果、集団経済の預金の割合は増加していると考えられる。

参考文献

- 石川滋（1990）『開発経済学の基本問題』岩波書店。
- 袁堂軍（2010）『中国の経済発展と資源配分 1860-2004』東京大学出版会。
- 中兼和津次（1992）『中国経済論——農工関係の政治経済学』東京大学出版会。
- 中兼和津次（2015）「石川滋と中国経済研究」『アジア経済』第65巻第3号、93-113ページ。
- 松村 史穂（2011）「1960年代半ばの中国における食糧買い付け政策と農工関係」『アジア経済』第52巻11号、2-26ページ。
- 三木 毅 1956「新中国における人民幣の発行と流通」『室蘭工業大学研究報告』第2巻第2号、497-509ページ。
- 高維（1958）「第一個五年計画期間的農村信用合作」『金融研究』第4期、52-58ページ。
- 胡鞍綱（2007）『中国政治経済史論 1949-1976』清華大学出版社。
- 馮海発・李準（1998）「我国農業為工業化提供資金積累的数量研究」『経済研究』第8期、60-64ページ。
- 盧漢川主編（1986）『中国農村金融歴史資料（1949-1985 大事記）』出版社（不詳）。
- 盧漢川・王福珍など編著（1991）『中国農村金融四十年』学苑出版社。
- 孔祥智・何安華（2009）「新中国成立 60 年来農民对国家建設的貢獻分析」『教学与研究』第9期、5-13ページ。
- 林毅夫・蔡昉・李周（1994）『中国的奇跡:發展戰略与經濟改革』、上海三聯書店、上海人民出版社。
- 劉願・李娜・劉志銘（2017）「農業剰余轉移与中国城鄉收入差距-基于統購統銷政策的理論与実証研究」『財經研究』第8期、109-121ページ。
- 尚明主編（1989）『当代中国的金融事業』中国社会科学出版社。
- 孫同全・潘忠（2019）「新中国農村金融研究 70 年」『農村經濟觀察』第6期、2-18ページ。
- 唐成・張誠（2020）「重審計画經濟時期農村金融的作用」第17回中国金融年会報告論文、

1-16ページ。

中国人民銀行農村金融局信用合作科編（1955）『1954年農村信用合作的組織發展与經驗』財政經濟出版社。

中国農業銀行山東省分行（1991）『山東農村金融歷史資料（1938-1990）』出版社（不詳）。

中国人民銀行編著（2008）『中国人民銀行六十年-1948-2008』中国金融出版社。

趙学軍（2006）『中国金融業發展研究:1949-1957年』福建人民出版社。

周脈伏（2006）『農村信用社制度變遷与創新』中国金融出版社。

周立・周向陽（2009）「中国農村金融体系的形成与發展邏輯」『經濟学家』第8期、22-30ページ。

周立（2020）「中国農村金融体系的政治經濟邏輯:1949~2019年」『中国農村經濟』第4期、1-23ページ。

Ishikawa, Shigeru (1967), "Net Resource Flow between Agriculture and Industry : The Chinese Experience", *The Developing Economies*, Vol.5 (1), pp.3-50.

Knight, John and Lina Song(1999), *The Rural-Urban Divide: Economic Disparities and Interactions in China*, Oxford University Press.

Levine, Ross (1997), "Financial Development and Economic Growth: Views and Agenda," *Journal of Economic Literature*, Vol.35(2),pp.688-726.

Nakagane, Katsuji(1989), "Intersectoral Resource Flows in China Revisited: Who Provided Industrialization Funds?" *The Developing Economies*,Vol.7(2), pp.146-173.

Nakagane, Katsuji(1995), "Intersectoral Resource Flows in China Revisited—In Memory of the Late Professor Shigeru Ishikawa", 『中国經濟研究』第12卷第1号、2015年3月、pp.53-56.Zhou Li, Feng Hui and Dong Xuan(2016), "From State Predation to Market Extraction: The Political Economy of China's Rural Finance, 1979-2012," *ModernChina*, 42(6),pp.607-637.